

阿賀路の文人

首途に

名にし負う麒麟山、大河・阿賀野川を懐に抱く津川の風景は、多くを切つて取り出してみると、宛も画中に描かれた高山流水の別天地の如き仙味を漂わせるものである。そのような山紫水明の美しさは、言うまでもなく、古来多くの文士の眼を引き付け、虜にして離さない。津川に清遊した文士には実に多士済済なる面貌が揃っており、その足跡を辿れば、地方史研究の域を超えた興味深い文苑史を織り成すことが出来るものと思われる。

文士を魅了したものはもちろん、名沢山水の美しさに依るところが極めて大きい。それと共に、文人の受け皿となるような地元の人々の文化に対する理解、関心の深遠なることが土壌としてあったのも見逃せない事実である。そして更に、それら地元の人々の中から自ら詩・書・画等に精進した文人肌の人物が出現すれば、その人を基盤として中央文化との交流は一層、活発化をみせるものである。津川町（現阿賀町津川）正法寺住職をつとめた乙川大愚（一八九八―一九五六）などは、その代表的な存在で、大愚の正法寺をいわばサロンとして、棟方志功をはじめ個性豊かな高逸の士が来町を果たし、書画詩歌等の揮毫に心を遊ばせたのだった。磯野霊山もその一人である。

霊山（一八七八―一九三二）とは一般に、東京美術学校を卒業する際、その式典の席上、総代として当時の画壇を非難した答辞を偉並ぶ教官や来賓の目前で読み上げ、そればかりか、そこで即座に卒業証書を破り捨てた

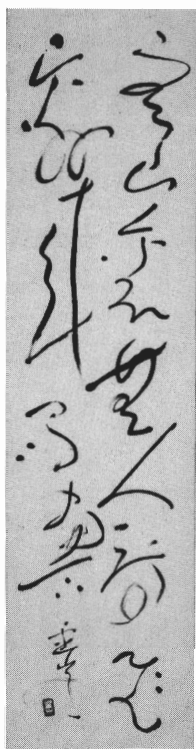
岡村浩

という破天荒な逸話が伝わる異端の画人として知られている（註一）。ただその作品の評価は、どちらかと言えば、技量に比見して巷間の価値感に残念ながら思いのほか低い。

次いで取り上げる味方海山とは、筆を一切用いず自らの指先に画料を付け、自在に紙面に指を這わせ躍らせながら制作した、所謂指頭・指墨画を本格的に行った画人である。新潟産ながら津川の町内には独特の筆致の遺作が散見され、当地との墨縁浅からざることが推察される。

今川魚心子（一九〇五―一九八四）は今良寛と称された福島県境「宝来寺」住職で、霊山と大愚に通ずる隠者芸術の系譜における一人。そしてこの魚心子が注視した山間部に維石巖々と建つ坂口五峰（一八五九―一九二二）に関わる詩書碑。各々が孤影を保ち僅かに声明を点々と残す。これら

図1 霊山書・軸「寒山裏無人房飛禽来鳴窓下 霊山子」



回避の地にあつて、意外にも中央の士と友誼を通じ風雅を宣揚した人物の事績につき、筆者は平成四年の初探以来調査を重ねてきた。

本論においては、津川の山川幽境たることに魅了されそこに生涯を閉じた複数の文士の特筆すべき資料紹介を逐次行いながら、阿賀路の文化史の一断章を照出することを試みたい。

第一章 磯野靈山

略歴

靈山は新潟県内に夥しい量にのぼる作品を遺している点から、ややもすれば地元出身の作家として取り扱われることが間々あるようだが、それは当たらない。

靈山、磯野氏、本名寿吉。少壮期「露聲」と号す。明治十一年（一八七八）六月二十九日、佐賀県杵島郡橋村（現武雄市）の家譜は代々鍋島藩の士族に列する家柄に生まれた。明治三十九年四月、東京美術学校に入学し日本画を専攻、同四十年三月卒業。卒業の翌日に長岡にやって来て精米所で勤務するという極めて特異な新潟との出会いが伝えられる。何故、新潟県長岡市に姿を現したかについては不明（註二）。その後、明治四十一年より高田日報社へ入社、軍事記者として新聞誌上に勇を鼓した論説や、俳画に西洋画を併せたような挿し絵を描き続けた。我が国に初めてスキーをもたらししたレルヒ少佐が一九一一年、第一歩として高田に来たことに伴い接見し、スキー競技会に顔を出したり関連する記事を掲載するなどの行動も残されている。高田在住時代、周囲にその絵を評価する後援者も出来、作品頒布会も開催された。

大正七年（一九一八）は靈山にとって転機となった。数え年四十一歳のこの年、家族を引きつれ上京、東京都牛込区薬王寺に移住を果たしたのだった。次いで大正十年には信州柏原に清遊し、一時的に俳諧寺の主をつとめることもあったが、同十二年四月には杉並区方南町の東運寺（通称釜寺）

境内に居を構え、揮毫に専念する文墨三昧の生活を始めた。

靈山が影響をうけたと思われる人物は、高田においては東洋越陳人があり、上京後は茨城に小川芋銭を訪れている。作家としての力量は、白隠や仙厓の作品に一脈通じる、禅味を醸し出す俳画に最も見応えを覚え、靈山の編集した雑誌「門外芸術」（仙厓号・大正九年刊）に、余程両者に傾倒した心境が裏付けとして読み取れる。無駄な表現を排除した省筆の美を感じさせる画線の筆致と、画讃にみる書の流動性に富んだ筆触は紙幅中互いに融合し、書画一致の美を現出している作が、とりわけ大作中に見られる。昭和二年には「今日庵」と称すアトリエを完成させ、これ以降いよいよ筆勢に生気が感得されるものとなったが、同七年（一九三二）五月二十三日、外出先で倒れ、二日後五十五歳の生涯を閉じた。墓は東運寺に建てられ、同寺の山門付近には「おれとしてにらめくらする蛙かな」と刻まれた自筆句碑が建立された。石文前方には蛙に見立てた大石が置かれ、唯一の靈山句碑に相応しい光景に映る。

図2 軸（137×21）「石女舞作長寿曲 靈道人」



二 新潟県との因縁

次に、靈山と新潟との接点につき具体的に探っていく。長岡を振り出しに高田での新聞記者として十余年に及ぶ越後での生活にピリオドをうち、画人としての本格的な歩みを目ざし東京に画室を構えた靈山であったが、元来彼は自己の世界観を自分の足で踏み固めていくが如く、知己を頼りながら旅を好む生活様式がその行動の礎として残った。したがって、東京に本居地を構えたとはいえ、その後も知己の居住する新潟県内を巡遊し、中

でも新潟・栃尾両市、そして津川の町並や風情を特に心に留め、写生の旅の杖をながく置いている。

霊山に関する最も基礎的な資料は、没後昭和十一年（一九三六）に刊行された『霊山子遺墨集』（若月作市編・限定百部刊）であり、それには作品・印譜・随筆・論述・年譜が収められている。年譜をみると、制作旅行の概要が把握出来、昭和三年夏（五十一歳）、東北及び北海道まで足を拡げ、同五年には初夏より秋にかけ、長野・新潟から東北各地を歴遊したことが記されている。その昭和五年の条には、「長岡の岸氏、新潟の宗現寺乙川禅師、酒井氏、朝海氏、名達氏、津川の正法寺石川（乙川の誤まり・筆者註）大愚師、仙台の渡邊氏、白河の吉成氏等はいつも晝伯の良き理解者であり同情者であつた。」と年譜にみえる。年譜の挿し絵には「霊山寺のある日」と題する墨絵が掲載されているが、食卓風景をあつさりとした筆致で描出した画面の右隅には、「越の味名達さんより頂きしもの」と讀が添えられており、物心両面にわたり越後の人々から助勢を受けていた有様がここにも浮き彫りにされている。尚調査の結果、新潟県人としては、

①酒井謙三郎（新潟市古町通そは屋「山文」店主）

②高橋虎（碧水と号す・『新潟警察消防新聞』紙上で霊山の紹介等を行った）

③諏佐悌三（新潟県栃尾市の霊山後援者）

④乙川文卿（新潟市海嶽山宗現寺主職）

⑤乙川大愚（津川町明海山正法寺主職）

⑥今川文暁（魚心子と号す・豊実金華山宝来寺住職）等

が霊山の作家活動に触れ、顕彰を行った人物として挙げられる。

新潟市内においては、西堀通に面する宗現寺に逗留し、乙川文卿老師の他、酒井氏や附近の病院長・店主達に囲まれながら、驚くべき多数の揮毫を行っている。それらの如何なる小品でも必ず署名・捺印が施されているのも特徴の一つである。宗現寺にて制作されたものには「海嶽山中」と款記にみえ、また制作年代については「辛未十月」が多く、中には「庚午春日」と入れられたものも伝世している。これは、昭和五・六年に当り、何時何処で制作したものが明らかに読み取れる。年譜等文献資料に記され

ていた、新潟市来遊の事実を裏付ける一証左と言えよう。

因みに数多い遺作中特にこの「海嶽山中」落款作品は出色の作で、また大作が多い。宗現寺に今も伝わる「辛未十月海嶽山中霊道人筆」と落款のある虎に乗った法丈を描いた大幅中の大幅と言ふべきものや、「波留那連者曾波多能毛乃美奈和良布（はるなればぞはたのものみなわらふ）庚午春日 霊山子畫」と讀のある二折屏風、「画仙越陳人置酒愛石」等と讀のある六曲一双屏風は、暢達した墨線による無類の傑作である。

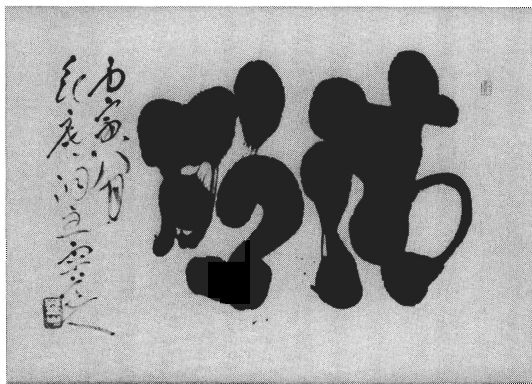


図3 軸 (35×49)

「清明 無磨洞主霊道人」(49歳作)

三 阿賀路における霊山の足跡

次に続いて、肝心の霊山と津川の結び付きに閑し、先人の遺した文献資料や霊山の遺墨を探りつつ、具体的に触れていきたい。

先述したように、霊山と津川の契機を作った主たる要因は乙川大愚の存

在である。このことは、諏佐悌三の記した「霊山と津川」（『新潟警察消防新聞』二七五号所収）が要点を伝えているので、一部引用したい。

津川正法寺住職故乙川大愚師は性洒脱、天衣無縫の傑物であった。しかも書画をよくし、特に篆刻に致つては大家の域に達していた。霊山と大愚和尚との交渉は、大正十二年九月一日の関東大震災の折震災直後余燼の燻ぶる本郷の街頭に立つて霊山が友人達と共にスケッチ席画を描き羅災者義捐金を募つていたところたまたま通りかかった乙川師が忽ち意気投合して肝胆相照す水魚の交友となつた。……昭和二十年八月の長岡の大震災を機に多数の霊山作品中膨大な書簡集の中にチョイチョイ津川に行くとか、乙川和尚に会うとか書いてあるので、私は急に乙川師に会つて見たくなつた。たまたま古道具屋の店頭で大愚帳なる冊子を発見した。……私は早速取るものも取りあえず大愚帳一冊をふところにして津川へ出向いた。……迎えられた乙川師は初対面の私を快く招ぜられ、持参の大愚帳をお目にかけると、これは今から二十年ほど前長岡で書いたものである。帳に捺印した印章につき一々その実印を見せて頂いた。当時般若心経一卷を篆刻で出版されたことは頗る有名であった。それから霊山の思ひ出を語り合うて数時間を夢中で過した。和尚は霊山の半切にうそ徳利に盃を描いた絵にうその皮化けの皮などぬぎすてて君としくめば楽しかるらん と賛してあるのを床に掛けて下さつた。なおタソスの引出しをさくろ浴衣を一枚出された。それは霊山との合作でシャリコウベの染抜きで、この揃えの単衣を着て二人でキリン山温泉はんせん閣福住で呑み且つ画きつ又時にその家族や娘たちを連れて阿賀の清流に舟遊びしたものであると語られた。……

このように諏佐氏の追憶談中には、津川における霊山遺墨の所在が綴られていたのだが、就中「徳利自画讃」（半切作品・軸装）及び浴衣帯に直に淡彩模様と句書を揮毫したものは現在も正法寺に伝わっている。

ところで、霊山と大愚とは如何なる理由で知己となつたのであろうか。この点、諏佐氏の筆によれば、大正十二年の関東大震災直後、義捐金を作るため本郷の街頭でスケッチをしていた折、偶々大愚との出会いを得た旨

が叙述されている。霊山の関連資料はこの言を引いてか、殆んど大正十二年の出来事として、乙川大愚との邂逅を記録している。偶然の話としては少々都合が良過ぎるくらいもあるが、これは諏佐氏が大愚からのきき語りの中より得られた記述である。

他方、今川魚心子（一九〇二—一九八四）が新潟における霊山の思ひ出を語つた記事の中にも、霊山と大愚との接点に関する記事が見える。抄録引用すると、

（霊山が・筆者註）新潟を訪れたのは昭和五年の初夏、山文さんの世話で新潟宗現寺乙川老師（私の師匠）の好意で同寺に暫らく滞留、本堂につゞく廊下座敷二間で新潟の生活が始つたのである。浅海琴一、難波、黒岩、清水氏等のお医者さんたちとも交遊、淡々たる画談や画を教えて楽しい日がつづいた。その時私（魚心子・筆者註）も二十代であり、いつの間にか食事の配りや客の取次など、時には一緒にお茶をのんだり世間話など、時として一日中紙を前に描いているのを見ていたが、傍らから口を容れられない位その姿は美しいものであった。私の師匠も時折り絵の手ほどきを受けていることがあった。「こうして水をふくませ墨をふくませてスウツと横に一線、この中に山あり川あり雲烟が生れます」という霊山の言を今でも憶い出す。

津川の大愚和尚と交遊が始まつたのも此の頃で、山紫水明の津川を愛して、きりん山や阿賀野川のスケッチが大分あるのもこのせいであり、河畔で楽焼なども楽しんでゐた。大愚和尚とは大正十二年の関東震災後街頭で知合つたとも云われている。……（『印人』正平、大愚、画人、霊山の思ひ出）——『いしづみ』第四号所収）

とあり、霊山・大愚の邂逅に触れた箇所諏訪氏記文と若干の相違を呈しており、問題が残るところである。

それにしても、この魚心子の執筆した霊山評は実に生彩に富んでいる。魚心子と霊山との関係はどのようなものだったのだろうか。諏佐氏の「今川文暁師との一夜」と題す一文に依れば、大体それをも窺うことが出来る。

師（魚心子のこと・筆者註）は前記乙川大愚師の法弟であり、靈山と因縁浅からぬ新潟市宗現寺にて得度、師の信任厚くすでに稚僧時代から将来を嘱目されたが、いわゆる坊さんらしくない坊さんで、文墨の趣味も饒かに大愚和尚と共に書画、篆刻にも優れた文人の風格がある。昭和初年師がまだ若い時であったが、靈山宗現寺に在宿当時万事話をされた処スッカリ靈山の氣に入りすでにその頃から今日あるを想わしめた師は当時のなつかしい思い出の数々を語られ、あたかも生ける靈山を眼のあたり見るがごとく、次から次へと話は尽きず、秋の夜長の更けるのも知らず榮若湯をいただきながら、とうとう一夜を泊めて貰う始末、所蔵の仏画（尺五絹本靈山傑作）に香を薫じ静かに床に就かせて頂いた。

翌朝——すがすがしい山の嵐気の滯り本堂の前で記念の撮影、正面大額は安倍能成先生の染筆、これ又不思議の御縁、師の靈山先生をスケッチされた肖像画を頂戴して津川へ引返し正法寺キリン山醸造元のご主人、倉田国手を歴訪、最後に温泉福住へと足を延ばした。……（『新潟警察消防新聞』第二七五号所収）

とある。

さて、靈山は津川の風情を非常に愛し、「津川八景図」なるもの（註三）を制作したと伝えられる。新潟市内の古老の口碑に依拠すれば、それが一括して以前、古美術商の店頭に表示されたという。現在の調査段階で、資料中より摘記し得る津川を描いた靈山作中、図版が確認可能な分を挙出すると、

- ①「津川風景 靈山」（『新潟警察消防新聞』第二七五号・四頁）
- ②「津川正法寺 靈山子」（『いしづみ』第四号・二頁）
- ③「津川朝霧」（BSN新潟美術館「異端の人 磯野靈山展」昭和五十六年七月十一日～八月九日・出品作——以下「BSN」と略記）
- ④「津川森公園 辛未十月靈道人画」（「BSN」出陳）
- ⑤「奔憚春音 靈山子」（「BSN」出陳）
- ⑥「きりん山の山裾 靈山子」（「BSN」出陳）
- ⑦「阿賀常浪合流 靈山子」（家蔵）
- ⑧「越後津川風景 靈山子」（『靈山子遺墨集』）

⑨「きりん橋雪解 靈山子」（家蔵）

⑩「越後津川風景 靈山子」（阿賀の館「越後ゆかりの画人 磯野靈山展」昭和十五年十月二十一日～十一月九日・出品作）

⑪「津川風景 庚午夏靈山子」（『靈山 乙川大愚 森有一集』（平成十八年・越佐文人研究会刊所収）

⑫「津川山道 靈山子」（⑪と同じ）

⑬「常浪川釣魚 靈山子」（⑪と同じ）

——カギカッコ内は讀文を指す——

そして先に掲げた正法寺所蔵品「徳利自画讃」と浴衣帯への靈山作の計十四点が数えられる。

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩は何れも、33×45センチメートル前後で茶掛程の大きさ。落款は①を除けば、ほぼ同じ調子に筆を走らせた「靈山子」サインで、落款印は皆同じ「靈山」（白文印）を用いている。推測の域を出ないが、これらの中には、元は一冊の画帖に収められたものを軸装に仕立て直した、いわば同時に揮毫された可能性を漂わせるものが含まれている。

④⑧は半切作品で、捺された印は別の「靈山」（朱文印）であり、実はこの印は大愚の刻したものであることが、魚心子の記文により証明される（『いしづみ』第三号・四頁参照）。

また④の落款より、これが昭和六年十月に制作されたものであることが判る。『靈山子遺墨集』の年譜により昭和六年の条を見ると、この年、悪性の風邪で重態に陥ったが奇跡的に回復し、後、新潟に遊んだと記述されており、この④の作品により、新潟という記載の範囲に津川も含まれていることが指摘出来る。

大愚の刻印を捺していることから、二人の直接的な交流の様子が類推されるが、③の画面には（図4）、山門の下に佇む一僧が描出されており、その左脇には「筆塚（註四）」がみえる。この光景は、會津八一の書を大愚が刻した「正法」木額が掲げられた本堂を背にして山門を見据えたもので、筆塚の位置も実際のそれと一致する。靈山の作品はとかく省画が進む余り、構図のデフォルメが意図的に誇張されているように思われがちだが、事実を歪曲せずに描き上げていることがこの作からは窺える。この山門下

の一人物、これは『いしぶみ』誌上の魚心子の解説に依ればもちろん、大愚である。

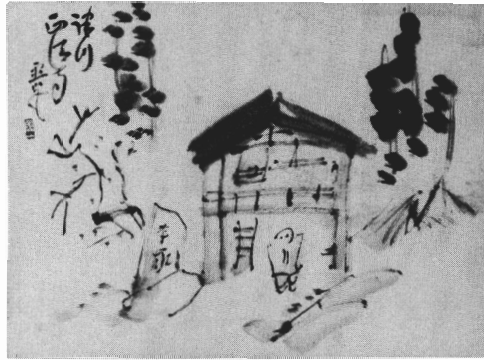


図4 軸「津川正法寺 霊山子」

小結

霊山が作品の素材としたのは、花鳥・山水・人物画まで多岐にわたるが、花鳥や動植物を題材にしたものは、同じ構図の作を比較的多く制作しており、塑型が読めるきらいもある。ところが、山水画における写生行での揮毫作の方は、その時々描かれた一枚限りのものが殆んどのものである。先に「津川正法寺」作のところで触れたように、霊山のスケッチは記録性という点から見ても我意に失したのではなく、そうかと言ってありのままでないようである。構図の骨格を捉える確かなデッサン力と共に、そこには被写体の生気を熱く吸い取ろうとしている霊山の姿勢が感じられてならない。先掲魚心子の記述に「こうして水をふくませ墨をふくませてス

ウツと横に一線、この中に山あり雲烟が生れます」という霊山自身の主観がみられたように、出来上ったのは胸中の山水である。

霊山の若書きには、驚くべき細密画も遺され、書の方では習気を感じる作風が目につく。その後、画が変れば書もまた変わるといように、書画の線が一体となって変遷の一端を辿っているが、津川の風景画は、五十五歳で閉じた霊山の短い生涯における晩年の完成された作風を反映するものであることは、画のみならず、落款の形状や画讀の書がそれを物語っているとされる。古来、南画のあるところ、必ず詩・書を伴うと称される。詩・書・画三絶、この三つを尊ぶ精神が揃って初めて文士の境に逍遙することが出来るという。霊山、そして次章で言及する海山の両山画伯共に、紙幅に披露された画讀の文字を見ると、特に霊山などは時に画名を覆う程の見応えのある風韻を覚えることがある。書人である私が如上の画人の作品に魅了される所以である。

最後に、このテーマを考察する意義についてであるが、霊山が越後の各地での風情をこよなく思慕する中でもとりわけ、津川への思い入れが強かったことを感じさせる揮毫作品があることを私自身、遺墨と対峙して直截的に看取したからに他ならず、これを多くの方々に認識の共有をして頂きたい。今後の課題として、霊山・大愚・魚心子三者の作風を比較し、相关性につきもう少し掘り下げてみたいと思っているのだが、それには宗現寺・乙川文卿の存在が考察のポイントとなるように思われる。

註

- 一、卒業証書は筆者の調査時、東京在住の長女・中浦道子女史の手許に、軸装にされ伝世していた。
- 二、魚心子は「卒業式終了後」その足で田端駅から折柄発車寸前の新潟行に飛乗って、翌朝長岡駅に下車、どういう手づるか或精米所の米搗男としてコットンコットンと足踏みをやっていた。」と記している(『いしぶみ』第四号参照)。
- 三、『新潟警察消防新聞』二七五号参照。
- 四、正法寺境内にある関山春方のために門弟が建立したもの。春方は医師

であり、また郷学を支えた寺子屋の師匠。筆塚の銘文には「天保戊戌七月野村恵識研堂星平書」とある。春方が天保三年（一八三二）没後、天保九年（一八三八）に建てられた。徳永次一編「郡内のいしづみを訪ねて・その二・津川町」『阿賀路』第三一集所収）参照。

第二章 味方海山

一 断片的資料からうかがう海山像

図5に掲示するのが、味方海山である。右手に扇子を握った紋服を着用し端座した姿で、翁の座している周囲の光景に関しても、床の間には中央に画軸を掛け、左右にも花鳥の軸を配し、その元に置かれた太刀も来歴の確かそうなもので、脇床の模様などもまた、並のつくりではない。この人



図5 海山肖像

物の志と嗜好の高さを、部屋の調度品が如実に物語っている。

尚この写真の裏をみると、「新潟県北蒲原郡松ヶ崎 味方海山」と毛筆で墨書されている。もう一枚、左胸に幾つかの勲章をさげた洋装の肖像写真も残っている。

図に掲げた肖像写真は、津川町二区在住の味方虎一氏より提供していたものである。この方は海山の孫に当たり、大正三年（一九一四）生、調査時満八十一歳を迎えられ、海山の揮毫した掛軸を多く保管されていた。さらに、その弟で同じく津川町二区の味方竹男氏（一九二五年生）より数次にわたり祖父海山につき口碑による伝承や、伝世作品をいろいろ拝見させていただくことが出来た。次にそれらをまとめて記述したい。

味方氏、本名は巳之吉^{みのきち}。画家。海山はその雅号で、公募展覧会で入賞を果たし、その褒賞として頂いた号であるという。文久三年（一八六三）、新潟市寄居町四十三番戸・味方万吉の長男として生まれ、明治十二年十二月家督を相続。昭和十一年、七十九歳の長寿を全うし、故里松ヶ崎（註一）で没するが、その生涯は岐阜県稲葉郡長良村に転籍したことが認められるのははじめ、様々な地を巡る生活を重ねた形跡がみられる。

東蒲原郡にはこの珍しい味方姓を名乗る方が何人か住んでおられるが、その全ての方が海山と一系の人々である。その系譜は次頁のようになる。

海山は絵筆を持ちながら各地を巡る中、津川の本陣旅館（当時「藤屋」と称す）に滞在した折には、二、三歳の幼児を連れていたという。事情により、子を他人に預け養育してもらうように依頼を行い、その一人・三男の泰司氏（明治二十三年生）が同郡上川村弘川の江川氏に身を寄せ、後に分家として味方姓を名乗ることを許され、これより味方氏が東蒲原郡一帯に土着するようになったわけである。

海山は画業に打ち込む日々と引きかえにするように、自己の家はあまり省みなかった人物のようにみられる節もあるが、家に多く残されていた表彰状の中には、画業に関するもののみならず多額の寄付金を行ったことを表彰するものが随分含まれていた。このように慈善事業に関与した形跡は、先の肖像写真にみる胸の勲章等とも一脈通じる話題である。居処を転々と

変え彩管を頼りに制作した先々で、作品を売りながら生計を立てた暮らしぶりだったことが推知され、竹男氏が先代や兄より伝えられた話によれば、子どもを預けた後でも何度か津川に立ち寄ったといわれる。

尚、海山はその後、妻をなくしてから別に配偶者を得、晩年は今の新潟市松浜で過ごした。その新潟にも遺族の方がおられる。また、先に挙げた肖像写真もこの松浜の自宅で撮影されたものと思われる。

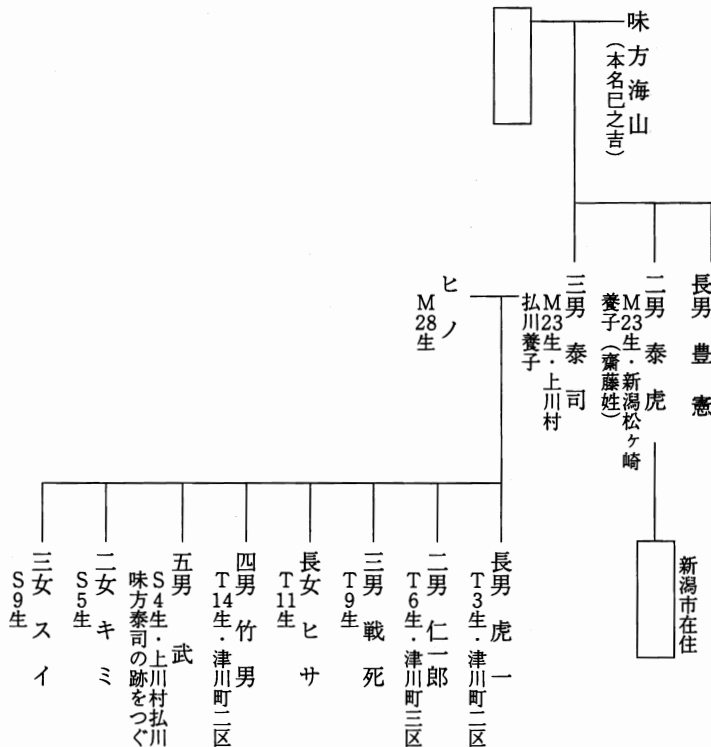
海山の作は現在新潟市内でも散見され、晩年はこの地でも精力的に制作を行ったと想見される。古書画を取り扱う古老の間では「海山」の名は知られているが、ただその人となりについては何ら語られることがない。先行資料としては唯一、『私の手記』（味方竹男氏記・平成四年刊）に海山のことがらが見出せる。やや長くなるがそこには、

とど（竹男氏の父・味方泰司）の父親は絵描きであった。……専門のアトリエを持たないその絵描きはどうしても旅に出て仕事をする以外なかった。旅に出て地方の大きな家の奥の部屋を間借りしたり、今でいう公民館などの施設を借りて何ヶ月もそこで仕事をして、また次の場所を尋ねて仕事をして歩いたようだ。そんな関係で三人の子供は当然連れて歩く訳にはいかない。妻が早く死んだのも原因で三人の子供達はそれぞれ他人に育ててもらったことになった。

長男は新潟市の近くの漁村に、次男のとは私達が今住んでいる町に預けられた。身軽になった絵描きは旅から旅へと渡り歩いて絵の売れそうな場所では何ヶ月もとどまって絵を描き、……特に今の岐阜市、あたりには長く住みついて仕事をしていたようだ。あとでとどがその絵描き（耕父）から預かったのか、もらったのか、岐阜市役所とか岐阜警察署とか岐阜消防署など官公庁から頂いた感謝状が数十枚もあり、また金一封にも当時で一〇〇〇円とか五〇〇円とかの金額が記入されていた。……

と引き続き、その事績のいくつかが点描されており興味深い。

東蒲原郡味方家系譜



海山の作風

海山の作は津山町の味方一族、及び旅館や愛玩者により保存されており、比較的多くの作品を過眼することが叶った。

その画の真骨頂は、何といっても筆で揮毫したものではなく、指で描い

た所謂「指頭」^{しじう}「指墨」^{しじく}画と称す作である点だろう。この特殊な技法は日本で萌芽したものではなく、中国より流入した作法で、邦人でこの技をよくした人物として池大雅が名高い。

大雅は享保八年（一七二三）生の画家で、書・篆刻ともに名を馳せた江戸期を代表する文士であり、京都市西京区には「池大雅美術館」が建てられている。館内の展示品には実際、大雅の指墨画もみられる。大雅は京を本拠地とし、高芙蓉や韓大年をはじめ錚々たる人々との豊かな交わりの中で自己の芸術を昇華していった。

この点、味方海山の指頭画の技法の淵源や師系について探及する必要があるものの、残念ながらその足跡に不明瞭さが伴うため果たせない。

したがって本論では、残された作品の紙面を具にみつめ看取し得るものや、人間に伝わる口碑を集めることに依拠し、海山像をもう少し浮き彫りにしてゆきたい。

先述したように、海山は幼い子を東蒲原郡上川村に預けている。津川滯在中には、今の本陣旅館周辺に足を運ぶことがしばしばあった。幸い、本陣女将の佐藤つい様は幼年の折、目の前で海山が制作を行った時のことをまざまざと、印象深く覚えておられた。それは、二階の或る部屋の襖に蟹の絵を書いた時のことで、まずタワシに墨をたっぷり付け、それを襖に小躍りしながらこすりつけ、まず甲羅を仕上げる。次いで自らの十指に墨を付け、爪の先まで巧みに使いながら一気に足を描出し、最後に小筆を用いて足の爪を細く補描し、「はい蟹の出来上がり」だったという。この間、瞬く間の神速さで、子どもにとってはまるで手品でも見ているように楽しく不思議な光景に映ったのだった。当時この部屋は十畳三間の広さだったが、その後改修され、佐藤つい様が津川を離れている間にいつしか、この襖絵は失われてしまった。この時海山は一週間位顔を見せ、随時四・五人の来客を受けていたらしく、記憶の中には乙川大愚などの姿もおぼろげながら覚えていてと話してくださった。

今本陣にはこの時のものとは別に、蟹の親子図を描いた額装作品が保存されている。構図は左に四匹の大きな蟹を水墨画で入れ、右方に五匹の

戯れる子蟹を淡彩で描いており、上郡には「人喚為横行 我正乍直行 甲午仲夏津川客中 海山生写（人よんで横行と為す、我はまさに直行をつくろ）」と画讃が施されている。関防印は「海通上舟波」（白文印）、落款印には「海山」（白文）「味方間」（朱文印）がおされている。この画讃には大変貴重なことが書き残されており、款記より作品が「甲午仲夏」つまり明治二十七年（一八九四）五月頃に、そして「津川客中」の折制作されたものであることが判り、津川を訪れた時期が特定出来る。この時三十一歳。前年、妻を失った海山であった。海山がこの絵筆を揮ってから取材時点で丁度百年が経過したわけだが、それにしてもは保存状態がよく、指頭画による温か味のある色艶をそのまま残存している。

佐藤つい様と同様に、やはり海山の揮毫する姿を見た人として、新善光寺の物江住職がいらつしやる。御住職より窺った話も先の佐藤様の言と同じく、周囲を驚かせるようにメリハリを効かせた曲芸師の如き有様であったという。新善光寺では海山の作品頒布会が開かれ、また刀剣や道具類の展示もあわせて行われた。

図6に掲げる作は画讃に「三友同心對歲寒 海山指頭作（三友は心を同じくして歳寒に対する）」とある松竹梅の水墨画で、新潟市内で見出したもの。出来栄えは海山の作中、それ程特筆すべき絵ではないものの、私が

図6 軸





「味方海山」



「賜天覧」



「指頭墨章」

図7 海山自用印
(原寸)

とくに注目したいのは引首印の「賜天覧」(白文印)なのである。子孫に伝えられた口碑に、「海山」の雅号は天覧展示会に出品した折に褒賞として与えられたといわれ、そのことを示唆する印文の存在は看過出来ない。因に、落款印は「味方海山」(白文印)「指頭墨章」(朱文印)が用いられている。この他に「指頭之作」(白文印)も多用しており、海山が特殊な指頭画を駆使することを誇りとした姿勢が自用の印文から窺える。

土着した血統から

史上の、あるいはそれに憧憬する地方の文人諸家の多くは、よく旅をしている。各所を漂泊する過程で、興の赴くまま心のままに、筆を執った。古典にならうところはもちろんあったとしても、職人的画家に比肩して技術や形似にとらわれない彼らの画風の息吹の源になった栄養源は、一体何であったのか。それは恐らく、未見の地を行脚し大自然の美を咀嚼し、解

放感に浸ること——自然を自己の内部に浸透させ、また自然の中に自己を思い切って投影させる開放感・自由な展開生活に起因するところが大い。見聞をひろめ知己を豊かにすることは更に、詩歌や学識等の教養を深めることにも直結する。教養を増幅すればそれだけ、画品も向上するという思想が、文人画家のバックボーンと目されていたことは言うまでもない。

海山の場合、いわば古人の制作態度や生活面の所作と重ね合わせてみれば、その遊歴を重ねた足跡はさほど特別のものではないかもしれない。ところが反面、彼には家を顧慮する時間・精神的余裕がなかった。肖像写真をみると、所帯やつれた風は微塵もない。

この点、海山の子孫の方はどのように思われているのだろうか。その心境を『私の手記』(味方竹男氏記)より窺うと、……それと自分(海山)の子供が育っている場所も気になったのか、時々津川にも姿を現わしている。古い旅館の一室を借りるとか、お寺のような所で仕事をしていたらしい。この地方の旧家に数は少ないが家宝のような形で残っている。「困った時の生活の足しにしないさい。」という事なんだろうが、自分の子供や親戚にはずいぶん絵を渡していたらしい。……私達兄弟も海山の孫にあたるわけ、長兄から二・三幅ずつわけてもらって持っている。最近年のせいか時々出して見たり、来客の時など気の向いた時お見せし、皆さん高く評価してくださるので、家宝として大事に保存して行きたいと思っている。……

とある。その記述通り味方一族では海山の遺作を大切に家蔵している(註二)。画題は山水・花鳥・風刺画等多岐に及ぶ。画蹟には世間・時局を風刺したものもよみ込まれ、主張の一端が汲み取れる(註三)。調査する側からみれば、制作年代の明らかなものが資料的に重視されるわけだが、「日出乾坤新 七十七翁海山指頭作」(朱文印「味方海山」白文印「指頭之作」)と讃の入った旭日双鶴画幅が残されており、年代の判明する作としては、これをもって下限とするものである。画面右下におかれた遊印は「積善以遺子孫」(朱文印・註四)と刻したものが用いられている。晩年の作に使用したようで、これは「善を積みて以て子孫を遺す」と解し、このことを孫の味方竹男氏に申し上げたところ、呵々大笑しておられた。ま

さに印文のように、その子孫は津川に根をはり歴史を積み重ねながら、始祖海山の作品を墨宝として守っておられる。

前章に紹介した磯野霊山も海山と同じく、一度家を出ると糸の切れた風の如く逍遙として家を離れ戻らなかつたことが共通点として挙げられる。霊山の難解な画讀を読みほぐしていくと、時局を風刺した画伯のオリジナリティな視点が横溢している。個性のしたたかな作風である。海山の作には霊山程強烈ではないものの、やはり社会の規範性に拘泥せず歩みを進めようとする姿勢が滲み出ている。海山の絵は古風であるか、けつして退色しない理由がこの辺にあるのではと考えられる。

私は越後文人の作品を取りあげる際、

○作風の来歴・師系の探究

○中央の文人との交流史

○中央の文人の力量との比較

主にこの三つの柱を念頭に置いて参究し、鑑賞を試みていく。徒に発掘を楽しんだり、興味的に作品を蒐めるものとは異なる。右の視点で霊山・海山二人の画人を捉えようとした時、津川を生国に持たない磯野霊山・味方海山の二山が、当地街道の歴史と山河の風光明媚に誘掖され、東蒲原一帯に作品を残していることを、これを機縁として多くの方々を知っていただければ幸いである。

なお、まさに脱稿を目前にしたところで、味方竹男氏より戸籍等の資料の提示をうけた。それを基に、簡単な年譜を編んだ。また新潟市豊栄博物館企画「指頭画家 味方海山展」(H22・6/5/6/27)が開催され、幾つかの新たな資料がもたらされた。その一つ、「伯爵 勝海舟」の署名で記された「味方海山君略伝」には、「君姓は味方名は昇、海山と号す、是予の名つくる所、軍医味方正直の男なり、文久三年三月十五日越後国新潟に生る、年甫めて五歳指を以て好んで細字及四君子を画く、父甚た之を奇とし携へて西京に入り、画法を田能村直入翁に学はしむ 翁頗る海山を愛し薰陶至らざるなく、専ら東洋画の妙諦を受く、後長崎に赴き諸家に従ひ画法を受く 大に得る所あり、更に進んで清国に遊ぶ、帰朝の後鎮西諸

国を遍歴し、名所古跡を訪ふ、再び三府に遊び、大家の門を叩きて雲煙を談ず、明治二十四年東都に入り浅草の南窓にし嘯詠することとなり、君頗る淡泊にして名を求めず 利に奔らず、其人に接するや洒々落々一見旧知の如し 而して児童を愛し直に指を以て花鳥を画き之れを与フルを以て無上の快楽と為す 又方今の奇人也」(原文カタカナ・旧字)と活字印刷した海山にとっては無上の光栄な紹介文が披陳された。ただし戸籍記載の三月一日生、本名巳之吉、父万吉と、海舟草文は異なる。伝聞による誤記か本人の意図が及んでのことか。直入に接点のあったこと、渡清の行迹も重視すべきだが、豊栄展のパンフレット表紙の「牡丹孔雀図」をみると直入の遺風が窺えなくもない。大倉雨村が明治五年、長井雲坪が慶応三年とこの頃越人の渡清者が従来知られる。遅れて日下部鳴鶴が同二十四年、中林梧竹は三十年と、邦人を代表する書人が続けて彼の地に遊んだが、全体でみれば一握りの人々に過ぎない。

註

- 一、松ヶ崎は昭和二十九年、新潟市に編入された。
- 二、味方一族が所蔵するものは『私の手記』に写真が掲載されている。とくに巻頭の青緑山水幅は、きめの細かい描写のもので、これが指頭画かと見まごうばかりの出来である。
- 三、本陣旅館「蟹画讀」の他に、「節分や鬼は心の外に出し」「暁の社頭に慾を祈るより酒を飲みてそして働け」等がある。
- 四、年代の判る作では六十八歳作大黒天画讀幅にこの印がみられる。讀文は「積善家必在幸福(善を積む家には必ず幸福あり)」とあり、印文「積善以遺子孫」と内容が合致する。

味方海山に関する年譜

- 〈文久三年三月一日〉 新潟市寄居町四三番味方万吉の長男として生まれる。本名巳之吉。群馬県邑楽郡の人と結婚。
- 〈明治十三年二月〉 長男豊憲出生届。
- 〈明治二十三年七月〉 二男泰虎、三男泰司出生届。

- 〈明治二十四年〉 浅草にて勝海舟が「海山」と命名。
 妻逝去。
 〈明治二十六年六月〉 二男泰虎、松ヶ崎浜村の齋藤氏の養子となる。
 〈明治二十七年四月〉 津川・本陣旅館「蟹図」制作（落款「甲午仲夏
 津川客中 海山生写」）。
 〈明治四十一年二月六日〉 京都にて久邇宮殿下及び妃殿下御前揮毫。
 須磨にて賀陽宮恒憲王殿下御前揮毫。
 〈同年二月十五日〉 広島新潟県人会にて揮毫。
 〈明治四十二年十二月〉 津川に三男泰司出生届出す。
 〈明治四十三年〉 長男豊憲、鈴木氏と養子縁組届。
 〈大正 三年〉 三男泰司、東浦原郡上条村大字弘川三六二番に
 分家届。
 〈大正 五年〉 松江にて寒梅図を制作。
 〈大正七年〉 海山、福島県岩瀬郡の人と結婚入籍。
 〈大正八年九月〉 金沢歩兵聯隊にて東久邇宮稔彦王殿下に清覧を
 受く。
 〈大正八年十一月〉 鳥取市に四男の出生を届ける。
 〈大正十年三月〉 岐阜県稲葉郡にて五男生まれる。
 〈大正十年六月〉 福井県武生市に千円寄付。
 〈大正十年七月〉 岐阜県稲葉郡長良村福光一六六六に転籍届。
 〈大正十一年一月〉 岐阜にて百作会を催す。売上半額を地元「名桜
 会」に寄付。
 〈大正十二年四月〉 松本で百画会。六十二歳。
 〈大正十三年〉 大阪朝日新聞にて揮毫写真掲載さる。
 〈大正十五年三月〉 東京にて学習院皇族御前にて揮毫。
 〈大正十五年九月から十一月〉 大黒天画賛制作（落款「積善家必在幸福 六十
 八翁海山指頭作」）。
 〈昭和七年四月〉 東京報知新聞本社にて揮毫。
 〈昭和八年〉 松浜地区太郎代金龍庵に奉納額。
 〈昭和十五年〉 旭日双鶴画賛制作（落款「日出乾坤新 七十七

〈昭和十七年〉

翁海山指頭作）。
 海山、新潟市松浜（現北区三軒屋町）にて逝去。
 享年七十九。

図8 軸 (140×65)
 新潟市豊栄博物館企画展目録より



第三章 乙川大愚

略伝

乙川氏、名は貞吉。明治三十一年（一九八九）、新潟の横山貞夫の三男として生れる。六歳で新潟西堀通の宗現寺住職・乙川文獅の養子となり得度。次いで大正四年、加茂の定光寺にうつる。大正七年、シベリアに兵役のため向かう。当地での精密なスケッチが伝存している。この時、多くの軍役将校との間で大愚の篆刻が注目され、彼らに贈られて喜ばれる。後、鶴見の総持寺で修業を続け、大正十三年、津川の正法寺に迎えられた。昭和三十一年（一九五六）、六十歳で逝去。別号に白雲道人がある。

本論のねらい

書画の作品を鑑賞する際、捺してある印の刻風・印文・大きさ・捺す位置・捺し方等から、作家の器量が推しはかれるものである。

篆刻は元々、中国から伝えられた文化だが、我が国でも明治以降、本格的な篆刻家・印人の台頭がみられる。新潟県においても、印人山脈と称すべき特徴豊かな文士の系譜を見出せる。その一人である大愚の印技を浮き彫りにすべく、諸資料を掲出しながら特異なる才能について言及したい。

棟方志功の記述にみる大愚刻印の評価

『書道講座』（⑥篆刻篇・二玄社刊）の巻頭に、棟方志功が篆刻の魅力に関し語っているが、その中に、

昔から、わたくしは印が好きでした。絵を観ても、書を観ても印の方を先に見る程、印が気になるのでした。画家でも、書方でも余り印の事まで想ひに乗せてゐる人達が少ない様です。……山田先生。石井先生。中村先生。乙川先生。香取先生。保多先生方、現在、大いに御働きになってゐる方々の印を持ってゐます。数は随分あるのですが、中々その方々様の御仕事をほんとうに生かすというのでせうか、その方々の御作を輝し様な絵や、板画が不足であります。……

とある。印を心底より愛玩している人ならではの言である。実は山田正平・石井雙石・中村蘭台、そして次に名の挙がっている「乙川先生」こそ、乙川大愚のことなのである。引き続き香取秀真・保多孝三等の著名な篆刻家が名を連ねているが、余程の人でなければこの大愚のことは見過ごしてしまふだろう。

実際、志功が大愚の刻印を用いた証として、住持した正法寺には志功が大愚に宛てた葉書が三枚伝世し、そこには、

①甚だお手数で恐れ入りますが、おん作印出来ましたもの何卒今までお見せくださった印譜のもののお送りくださいませ（新潟県津川町正法寺 乙川大愚先生 棟方志功 昭和二十三年七月三日付）。

②仲々美しく動く出来て歡喜忝なく中にも徑を朱文にしたゆかしき貴とくありがたく存じます。雑華書庫も何とぞ伏して乞願います。月末まで御事ありがたく待望いたし□（新潟県津川町正法寺大住、乙川大愚先生 ムナカタシコー・「富山県福光町棟方志功」と刻した住所印あり。昭和二十六年六月七日付）。

③先の大印とともにこの二顆亦大刀の歎喜です。篆刻の妙業を身にして忝けなくするよろこびを伏して礼拝です。

〈表〉——「棟徑出會」↑コノクミアワセヨロシクアリガタシ（新潟県津川町正法寺 乙川大愚先生 ムナカタシコー ①と同じ住所印あり）。

三枚共表裏一杯に躍る如き文字で墨書され、性急に大愚の印を求めようとする志功の生々しい情熱が吐露されている。皆、「乙川先生」と宛名を記しているのも注目すべき点である。県下、上・中・下越の好事家と、親

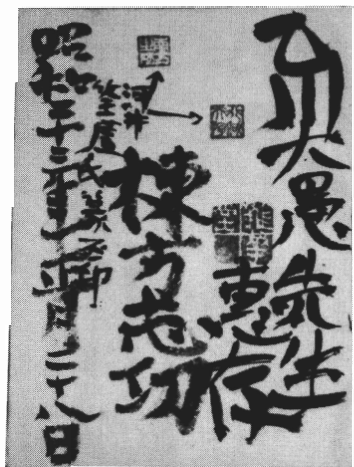


図9 為書のある
志功板画集

密な交際を重ねていた頃のこと。

ただし、正法寺所蔵の印譜には志功の印が含まれておらず、今となっては如何なる様相のものを刻したか判明しないが、志功のダイナミックな作風に合致した、刀の冴えた刻風だったのではと想察しつつ、残された他の印影を見る。調査時、寺には他に、茶掛軸二幅を始め数点志功の遺墨が伝わっていた。

大愚の印技の源流

篆刻には三法と称するものがあり、一、字法（篆書体に関する知識）、二、章法（布置・構成・配字法）、三、刀法（印刀の動かし方）からなる。一は文字学に精通することで、まず身近に手引書字書類を備える必要がある。二の印面空間の疎密の付け方、方寸の世界を如何に生彩に富んだ大無辺に操作するか、また三の刀運びについては、実際十人十色の手方があるのだが、まずは誰かに手ほどきを受けたり触発されるものが必要で、刀が手につかないだろう。

大愚の経歴を振り返ると、若き頃新潟市内海嶽山宗現寺にて修業を行っている。この時この地で共に過ごした法弟に、後の東蒲原郡豊実の金華山宝来寺住職・今川魚心子がいた。

相前後してこの二人が宗現寺に身をおいている間、一人の著名な篆刻家と同寺に旅の杖を留めた。山田寒山である。

山田氏、名は潤子、寒山と号す。尾張長久手村出身（一八五六―一九一八）。伊藤博文の助力を得、張継詩「月落ち烏鳴き霜天に満つ」で名高い中国蘇州寒山寺に新鐘を寄進し、一躍文苑の話題となった。篆刻の他、書画、ことに墨竹に安定した技を発揮した。凡流の一印人、一僧侶に終わらず、各界の一流の士と交わったやり手の、そして実力の伴った文人だった。越後と非常に縁の濃い人で、明治三十六年に来越した折、新潟古町通四番町の印判商・木村竹香と肝胆相照らす仲となり、羅漢鈕（鈕とは印のつまみの部分）の陶製印十六顆の刻印を依頼されたのだった。

寒山はこの時新潟に百余日にわたる長期滞在を敢行し、竹香との約束通

り、羅漢陶印を刻しあげている。因みにこの印について、竹香は余程酷愛したらしく、羅漢像の開眼式を星見天海禪師（越後刈羽郡出身）の手で厳修し、次いで新潟の名匠青山碧山による漆塗印龕（印入れ）の披露を白山神社近くの偕楽館で挙行了。最後には『羅漢印譜』（明治四十一年刊）の刊行がなされたが、如上の一大事業の流れの中、中央の文士の注目するところとなり、刻印の出来栄は山田寒山一生の傑作と諸方面から絶賛された。

この他にも木村竹香の二男正平の才に寒山は注目し、ついには會津八一等の斡旋によって養子と迎えるに到った。以後この「山田正平」は印壇の表舞台を歩み、日本的スケールの印人として活躍している。驚くことに、この正平も若き日に先の宗現寺において、大愚と一緒に寒山の教授を受けているのである。

当時の様子に関し、今川魚心子は『いしづみ』（三号・新潟拓本研究会刊）に「印人 正平・大愚 画人 霊山の想い出」（上）と題し、寒山・竹香・正平・大愚の交友関係を短文ながら活写しており、本稿のテーマの一つである大愚がどのように印技に手を染めていったかという点について、考察する手がかりを与えてくれる。一部引用すると、「乙川大愚は新潟宗現寺乙川文獅の弟子で私の法兄である。寒山が師匠の好意で宗現寺滞錫中、正平と共に篆刻を学んだものである。正平はその後寒山の養子となって喜美子夫人と東京寒山寺に住居を構えていたが、大愚は永平寺に修業に行き其後上京駒沢大の聴講生になり、縁あって津川の正法寺に住し、寺務の余暇に篆刻や、文人画篆額なども趣味として刻っていた。正平はその道で身を立てたが大愚は趣味として打込んでいた。だが趣味や道楽の域に止らず立派な作家であった。……」といい、また、「この卓絶せる二人（正平・大愚）の篆刻の妙手は共に新潟の生れであり、その作品印影等は後世に遺さなければならぬし、斯道後進の好みに資したいものと思う。」「思えばこの竹香と寒山の邂逅によって正平・大愚の巨歩的な印人が新潟に出現したのであった。」とまでいい切り、三者の絡み合いを明らかにする。

この文を読むと、戦後日本を代表する篆刻家の一人、山田正平と比見される乙川大愚の再評価が一層望まれると共に、山田寒山の来遊があつてこ



図10 宗現寺 法類 (昭和3年頃)

乙川謹映禅師
(大本山総持寺貫首)

乙川大愚老師
(津川正法寺方丈)

市川大死老師
(群馬大蒼院方丈)

今川文暁老師
(豊実宝来寺方丈)

本師乙川文獅老師
(新潟宗現寺方丈)

乙川文龍老師
(加茂定光寺方丈)

その二人の印人が越後より産出されたことが、強く認識されよう。以上の木村竹香・山田正平・乙川大愚の三人を、山田寒山を中心とする越後印人山脈の一系と称したいのである。

師・山田寒山との交わり

正法寺には寒山との交流を具体的に物語る手紙が保存されており、そのうちの葉書を一文掲してみる。

「印文篆書ノ照會ヲ要ス、坂字ノ邊ハ土ニ非ス、阪ナリ、五峯ノ印余リヲカシ、**南**之レハ何ント云モノカ不知、**南**ハ之レナリ 改刻ヲ要ス」とあり、実際に「峯」字の篆書体につき、大愚が寒山から批正を受けている。因にこれは、坂口五峰の印を刻す際のことと思われる。五峰は好んで姓に「阪」字を用いた。

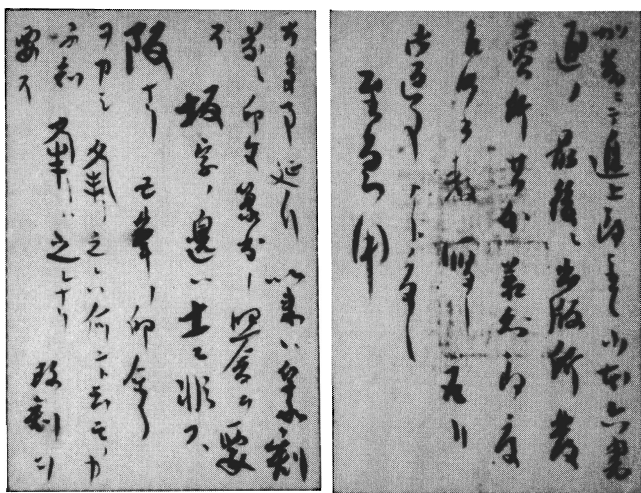


図11 大愚宛寒山葉書

この葉書の表を見ると、宛名は「新潟市西堀通七番町宗現寺内 乙川大愚様」と、まさしく先述の修業時代に当り、消印は大正五年五月十六日とはつきり読み取れ、差出しは「三条山田寒山」と、滞在地を含み墨書されている。

またこれより少し後、大正五年七月二十日消印の封書があり、宛名には「加茂町定光寺乙川大愚様」、裏面の差出しはやはり「三条寒山」と筆記してある。別に、新潟西堀通宗現寺時代の大愚に宛てた葉書が二通（消印・大正五年五月二十六日、七月二十三日）があり、何れも「三条寒山」署名。更に関連資料として、伊藤博文より寒山が授けられた書「四海皆兄弟天涯如比隣、春畝閑人」を絵葉書に印刷したものに活字で、「明治三十六年新潟宗現寺二遊ヒ錫ヲ留ムルコト壹百余日……今定光寺ニ客トナリテ新年ヲ迎フ、」日本寒山寺建立墨竹十萬講化縁全國漫遊ノ第一着、新潟縣加茂町定光寺室中ニ於テ、大正五年一月一日、寒山 山田潤」とみえる。いわば、年賀状である。

このころ寒山は、東京に寒山寺を興す資金集めのため、東奔西走し、諸家の後援を得、墨竹画讃揮毫会を各地で行うことを企てていた。丁度、大愚宛の手紙を記した年の正月には、加茂定光寺を逗留先とし、長期滞在を敢行していたところだったことになる。大正五年秋、定光寺で制作した米点山水幅があり、それを「大愚子」に与えた旨が款記にみえるのも、希有な資料であろう。のち寒山は三条極楽寺に寝城を設け、一年半過ごした。大愚宛葉書は、そこから発信したもの。

この時、寒山がどれ位墨竹を書き上げたか測り知れないが、翌々年大正七年（一九一八）、東京下谷区にて六十三歳で没した。全国漫遊の一番手に新潟にやって来たのは誠に興味深い、その越後路の寒山については、乙川大愚と正法寺資料を抜きにしては語り得ない。

會津八一と乙川大愚

この二人の間には、山田寒山・正平等が共通の知己としており、八一も大愚の刻印の力量を耳にしていたと思われる。

八一が大愚に宛てた、具体的に篆刻に関するやりとりの一端を証言してくれるその書簡を本稿に引用する。

御清安賀申上候。拙者今春全焼し保険金も無くからだ一つとなり親戚に寄食して揮洒を楽しみ居候。印も百五・六十顆焼きつくし困り居候。然るに明春京都にて個展をひらくため印が急に必要となり候爲め、義勇的御揮刀を願ひたく貰ひものの粗材を小包にて差出し候。至急神速に御奏刀御下附被下度候。

會	渾
朔	齋
秋	叟

いづれも白文にて気楽に御製作被下度候。甚だ輕少にて恐縮乍ら金六十圓小爲替封入潤賀として御咲納被下度候。十二月一日會津八一 大愚和尚榻下（新潟県北蒲原郡中條町西條 丹呉康平方より・封書書留・毛筆）

日付は昭和二十年十二月一日。「義勇的御揮刀」「至急神速」等、言辞の端々に、何としても早目に印が欲しかった八一の焦燥感が滲み出ている。

調べると、この書簡の僅か五日後の十二月六日付で、八一はやはり越後柏崎の篆刻家・勝田忘庵に、早稲田大学後輩で共通の知人・桑山太市を仲介役として刻印依頼の書状を出している。戦後の八一は書作を生活の糧とし、そのためしばしば個展を開催した。乙川大愚・勝田忘庵と立て続けに頼んだ印は翌昭和二十年一月四日より京都大丸にて開く予定の個展の揮毫作に捺すものとして、注文されたものだった。結局その個展は三月十八日から二十三日に延期されたものの、上記の書簡が今では越後印人と八一とを結びつける余品に代え難き重要な証左となっている。筆者は額装されたこれを、八一の養女となった渡辺きい子の実姉の御宅にて実見叶った。乙川家より、付近に居住する八一関係者たる同家に贈られたという。

次に、大愚は八一に如何なる印を刻したのだろうか。残念ながら、正法寺藏印譜類には印影が見当らず、公刊の『秋艸堂印譜』（二玄社）にも、一顆だに録入されていない。

ところが、同寺蔵の資料をみていたところ、昭和十六年刊の八一作品集『渾齋近墨』の表紙に、八一の自用印四顆が並んで捺されているのを見出した。

そこには、題簽の右側に何れも白文になる「會朔」「渾齋」「八一」、左に「八一」印がみえ、もし仮に押印するならば、一顆でよいわけである。出来上がってきたばかりの印を札状に押印して差し出す八一の性格からすると、労に謝する意味も兼ね自著『渾齋近墨』に、大愚の刻した印全てを捺して贈ったものと考えられ、つまりこの四顆は大愚の刻によるものと類推するのである。印影から窺える刻風は、後出する大愚作と距離感のない作で、しかも各印は仕上りの味と技法で幅を有し凡作ではない。

さらに二人の交わりを立証する遺物として、正法寺に伝わる八一墨蹟を列挙してみる。

- ①「大愚洞 戊辰春日 秋艸道人」(扁額)
- ②「寥廓 戊寅歲晚書之以寄大愚和尚并乞正字 秋艸道人」(扁額)
- ③「甚分明 正法寺方丈正之 秋艸道人」(掛軸・図12参照)
- ④「正法眼藏 大愚和尚鑒之 秋艸道人書於烏居北窓下」(掛軸)
- ⑤「正法 秋艸道人」(寺号・木額)



図12

五種共に大愚のために直接揮毫されたものであることが、記文内容から推察される。就中、三つに為書が記入され、残る①⑤についてもその語句

から当寺になれば映えないものである。⑤は、刻印の札として大愚に送られた作を木彫りにしたと伝えられる。この木額の肉筆は未見。

さらに款記から窺うに、①は昭和三年(一九二八)作で、いわば八一作中では若書きに属す。細線主体でやや線が動きすぎるようにも思われるが、それから十年後の昭和十三年(一九三八)作の②をみると、線条に重味の加わった筆致の堂々たるもので、一定の會津流が看得出来る。④には「烏有居」とあることから、罹災以降新潟に移住してからの作と思われる。墨の跡がうつったかの如き、筆圧のたくましさが見取される力強いもの。

図13に掲げるのは八一・大愚の合作で、これなどは大変珍しい二人の直



図13

接的な交渉を示す資料といえる。大愚が淡彩色で小便小僧を描き、その左半に八一が「赤髯々 白酒々 秋艸道人」と讃を記している。「髯」は「裸」の異体字。赤い体だが心のは無色清流、つつみかくしのない者が浄化してくれるの意。八一の合作の相手には中田瑞穂（新潟大学医学部教授・一八九三〜一九七五）との間にしばしば調和のとれた妙作をみるが、背景として余程意気投合しなければ、八一は軽々に合作に臨まなかったに違いない。

印影にみる文士との交流

今日、正法寺所蔵の印譜には、依頼に応じて刻した諸印が捺されており、それらより交友が垣間みられ興味深い。特に津川にゆかりのある文士のものを摘記すると、図14は竹工の名匠飯塚琅玕齋のために刻した印。「琅玕齋」は朱文の金属的な響きを有し、朱白の境界の美しい印。一転して住所印の方は、隸書体の温和な線質で雅味がある。

図15は、画人笠原軻（一八八五〜一九五五）のために刻した印。「伯道氏」は白文印で、「氏」の斜面の処理に工夫の跡がみられる。「伋」は、先の「琅玕齋」（朱文印）と近似した、刻す音が聞こえてきそうな空間に響く線質で、廻りの縁を大胆に太く備えているのもアクセントとなっている。他に、『いしづみ』（三号）P4には画人磯野靈山（一九七八〜一九三二）の自用印「靈山」（朱文印）が収められており、図16に転載させていた。

前述の通り靈山とは佐賀生、東京美術学校卒業後、上越地方で新聞記者をしながら彩管を揮った特異な文人。十余年新潟に在住した後上京したが、新潟に後援者が多く、間々逗留し各地で写生及び制作を行った。

この靈山は、「津川八景」なる傑作を正法寺で書きあげたという。大愚の水墨画は靈山に酷似しているが、画材としては達磨が多い。加えて本県最後の南画家・横尾深林人（一八九八〜一九七九）自用印二顆が存在する。

一般に、大愚の刻した印材自体をみかけるのは極めて稀なことだが、亀田の俳人・玉木豚春（一八九五〜一九八一・註①）の自用印が中蒲原郡亀田地方に一括して伝世しており、就中大愚刻印を三顆見出せた。これらの

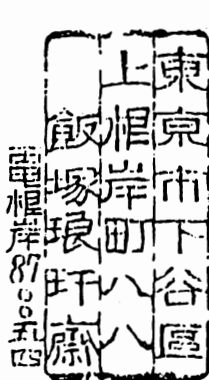
周旋には、前掲の今川魚心子が絡んでいると思われる。



図15 笠原軻印



図16 磯野靈山印・靈山



住所印



琅玕齋



図14 飯塚琅玕齋印

大愚刻印の真骨頂

刻印技量の本領が発揮された代表作を紹介する。それは『篆刻般若心経』（一帙一冊）で、文字通り般若心経の経文を数字ずつ印面に配し刻し上げた六十二顆を、冊子に分捺し刊行した。奥付によると、昭和三年十月十日発行、発行所・東京市芝区二本榎西町三圭社とある。総持石禅「通身是手眼」や権田雷斧の錚々たる顔ぶれが題字をよせているのも見逃せない（註二）。

本冊は出版者である三圭社代表・三井峽江の「出版の言葉」によれば、斯界業界誌『印章世界』誌上に三年にわたって連載されたものを好評につき一冊にまとめるに及び、大愚は旧作十九顆を含むのみで、あとは全て改刻を収録したものと説明される。連載時から数えて三度目の改作による労作なのだった。

これとは別に、私家版としてか半切画箋紙に如上の印を実捺したものが伝わっている。誠に雅味を帯びた、そして印が一堂に鑑賞できる印人らしい楽しみ方といえる。諸印は刻風・線の太細曲直・配字や縁の刻み方等非常に変化に富み、苦心の作たることがよく判る。画にデッサン力が不可欠なと同様、印でも配字や文字の骨格・結體の確かさが求められる。それらは丁度、模写して技術を向上させるように、先人の刻した印影を模刻するなど、汲古の精神が背景にあつてこそ得られるものなのである。

では、大愚の場合はどうか。どれ位古格を吸収しようと試みていたか、その学究の過程を如実に映し出している字書への書き入れを参考資料として掲出したい。

当時主に流通していた字書類は、『五體字類』（西東書房刊）『朝陽字鑑精萃』が知られたもので、大愚は後者を用いていた。これは、中国の古璽印や金石・碑碣から摘出集した字書なのだが、大愚はこれに飽き足らず、欄外にびっしりと収録もれの金石文字を記入し、きちんと璽印や碑碣の名称等の出典まで付記している。まさに手製の字書で、これらの埋め尽くされた各頁をめくってみると、鬼気迫るものが感じられ、大愚の篆刻に掛け

図17 『朝陽字鑑精萃』への書入



た執念がひとと伝わってくる。尚、ここまで調べ上げるには、他にも相当の参考資料を駆使したと思われる。寺にのこされたものでは他に、『印章備正』（一帙二冊）が目にとまった。これは越後の印人・富取益齋の記述を、恩師山田寒山が編集刊行した篆刻の手引き書を二十部限定で贈写したもので、やはり綿密な大愚の書き入れがされている。また『殷氏説文古籀補』（綿装本上下冊・光緒戊戌年五月重刊）には、「山田正平君所贈 乙丑孟春」と大愚の記入があり、大正十四年における両者の交友が偲ばれる。上記のことがらは、一面大愚にとつては舞台裏のことであろう。しかしながら、私が特に大愚の印技に興味を覚えた経緯には、この字書類への書き込みを眼のあたりにした時の強烈な印象が第一にあり、先の魚心子が例えた、単なる趣味人としての域を超えた、篆刻家の一人として取りあげてみたいと思っただけでもあった。正法寺には、残念ながら未完に終わっ

た『観音経印譜』（五冊本）の下書き印稿——印文を朱筆で書いた珍資料が保存されている。これも故人にとっては他者に覗かれたくない秘部だろうが、刻印という特殊な業の過程を明示するものとして、公刊等が行われることを念じてやまない。

調査の気運

以上、本稿では文人肌の法丈の諸活動中、特に篆刻を取りあげてみたが、新潟では数少ない、本格的な印人として論究されるべき素材を内含してい

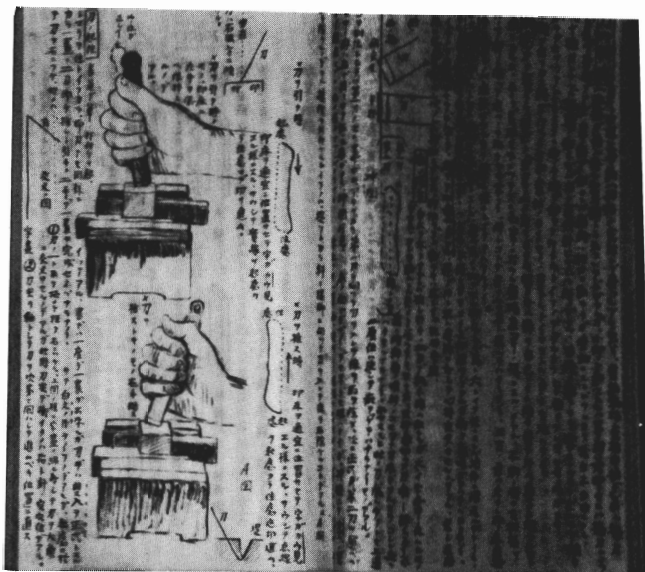


図18 大愚書入帳より

ることを強く感じた。

地元津川では作品展も開催され、また『篆刻般若心経』も半切一枚刷の形状作が復刻頒布され〔註三〕、再評価が行われるには好期を迎えて久しい。新潟市内でも、稀に大愚の書画を散見することがあるものの、大抵、その名は認識されず作者不明と扱われていることが多い。書もまた淡泊さの中に飛動を帯びた活気あるもので、この点からも興味深い言及が出来るのではないかと思う。今後の視点としたい。

註

- 一、玉木氏、本名瑋三。俳人。西会津奥川の生まれで、昭和二年三十二歳の時に教師として亀田に住むようになる。「新潟拓本研究会」創立会員で、魚心子と殊に交流を深くもった。
- 二、類書としては後、島田洗耳刻『般若心経印譜』（昭和十一年六月 善光寺大本願版）が刊行された。
- 三、阿賀の館主・徳永次一氏私家版。

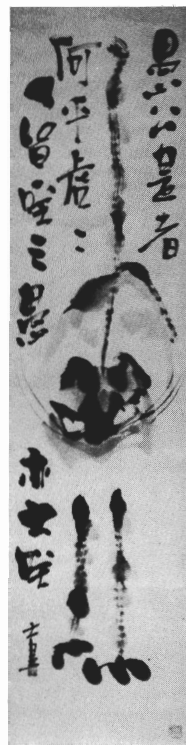


図19 大愚書画・軸